江戸城本丸炎上　釈文

史料A　天保十五年辰上年　御本丸炎上一件

①

天保十五辰五月十日朝六時頃
御本丸出火に付、急登
城いたし候間、長局より出火いたし候由、火勢
甚強候間、早々町火消共呼上げ、武士方
人数并町火消共精々相働、消防致し
候得共、火勢烈敷、御廣敷向・御臺所
向・御納戸口・中之口一圓焼募、御玄関
大廣間辺迄暫時火移、御長屋御門・
御掃除部屋・御小人目付詰所腰懸・御書
院番所へ焼出し、御玄関前、御多門御焼
失、同所にて火鎮申候、大奥向御殿向・長局
迄不残炎上、富士見御宝蔵御櫓等は
御別条無御座、右の段、御届として御城内
通り、西丸へ登城いたし、御老中方へ
御届申上、夫より炎上跡見廻り、九時退出
いたし候

②

辰五月十日
備前守殿御渡、松平豊前守より写受取、當番は外五ヶ所へ達す
大目付へ

今日火事に付、
公方様・右大将様為伺御機嫌、
明十一日、西丸へ惣出仕有之候間、四時
登城可有之候
但病気・幼少の面々は、月番の
老中山城守へ、以使者御機嫌
可被相伺候、且又在國在邑の
面々は飛札可被差越候
右の趣可被相触候
五月十日

右同断
大目付へ

御本丸炎上に付
公方様西丸へ被為
入候に付、御礼事等都て、是迄
御本丸にて老中謁候分は、於西丸

③

老中謁候
一　一位様にも西丸御廣敷へ被為入候
右の通向々へ可被達候
五月十日

右同断
大目付
御目付　へ

御本丸炎上に付、詰番の諸役人并當
番の御番方、西丸へ相詰候様、向々へ
不洩様可被達候
五月

辰五月十日、堀伊賀紙へ差越、年番當番へ達す（以下不明）
町奉行衆　　御作事奉行

御本丸御焼失跡為取片付、明十一日より

町人足五百人宛、日々御場所へ、明け六半時相揃候様、御断申上候間、此段御達申候、以上

五月十日

④

町奉行衆　御作事奉行

御本丸御殿向其外御焼失跡、為取片付候に付、町人足五百人宛、明十一日より、日々御場所へ相揃候様、大炊頭殿へ申上候段御達申候と処、町人足の儀は難相成趣被仰出に付、此段御断返御達申候、以上

町奉行衆　御作事奉行

御本丸炎上跡、火鎮方取片付御用に付、人足方松本俵四郎より、人足雇方の儀掛合次第、差支無之様、多人数差出候様、町方へ御達有之候様致度、此段御達申候、以上

辰五月

町奉行衆　戸川播磨守　榊原主計頭　佐々木脩輔　立田岩太郎

⑤

今十日

御本丸御焼失に付、古金銀引替方の儀、當分見合候様、土大炊頭殿へ伺の上、後藤三右衛門銀座年寄へ申渡候間、右の趣、引替方の者へ御申渡有之候様存候、此段御達申候

辰五月

町奉行衆　戸川播磨守　榊原主計頭

御本丸炎上に付、市中材木屋共所持の材木・板類・丸太并山挽物等の分、寸間巨細取調、直段附いたし、早々御差越有之候様存候、依之此段及掛合候

辰五月十一日

大炊頭殿へ黒沢正助を以返上

辰五月十一日　鍋嶋内匠頭承之

大炊頭殿

御本丸御焼失跡御銅物類買留町触の儀申上候書付　堀伊賀守　池田筑後守

御本丸御焼失に付、灰取片付取掛り候間

⑥

御銅物・鉄物類共御取締の義、精々申付、役々無油断申含、向寄へ取集方厳重に取調候得共、御場廣の御場所、殊に早朝より極晩迄、多人数入込、混雑仕候

間、焼御銅物・鉄物類とも、當分の内、買
請不申候様、町触の義、町奉行へ被仰渡
御座候様仕度、此段申上候、以上
辰五月

辰五月十一日、中川勘三郎へ達す

焼御銅鉄類の儀に付町触写
御目付中　鍋嶋内匠頭

御本丸御焼失に付、灰片付取掛り候間
焼御銅物・鉄物類共、買取申間敷候
若右御銅鉄物買取候者於有之は
吟味の上急度可申付間、心得違無之
様可致候
右の通、従町御奉行所被仰渡候間
其筋渡世の者は不及申、家持・借家・
店借・裏々迄不洩様、早々可相触候
五月十日

⑦
辰五月廿二日田中保蔵を以申上候

大炊頭殿
組与力同心上納金の儀に付御内慮奉伺候書付
鳥居甲斐守
鍋嶋内匠頭

一　金五百両　鳥居甲斐守組与力　二十五人
鍋嶋内匠頭組与力　二十五人

但當辰来巳両年、給知収納・物成の内を以
両度に上納
一　金四百両　鳥居甲斐守組与力（ママ）（同心）　百十九人
鍋嶋内匠頭組与力（ママ）（同心）　百二十人
但當辰年中上納
右は
御本丸炎上に付、上納仕度段、組与力同心ども
奉願候、尤組与力共儀は、去る戌年三月、西丸
御普請の節、高百俵に付、金壱両弐分づゝの
割合を以上納金被
仰付候儀も御座候得共、今般は前書の通り
同心共も相願候に付、是又奉願候ても不苦候
御儀に可有御座候哉、此段御内慮奉伺候、以上
辰五月　鳥居甲斐守
鍋嶋内匠頭

⑧
史料B　本丸炎上　奥女中焼死
五月十日
一　寅後御本丸御焼失、おてや立ちのき行衛不知、處々へ
尋出す、不知
十二日
御城よりおてや遺骸引取者、明朝御門明き前
平川迄可差出、其向より達有之
十三日
未明、馥之助・郁太郎、平川迄引取に遣す、夜に入帰宅

十四日
夜に入法名来る
十六日
一　御届の儀、本康へ取扱呉候様文通に及、返事向相違に付、
夜半再び文通に及、明日御城にて相談、御廣敷より文通可被致旨
返事来る
一　本康宗園、御広敷より文通有之候筈の処、遅刻に付、否承
度、文通遣す
十七日　返事来る
一　本康宗圓、御廣敷より文通有之候筈の處、延刻に付、否承
度、文通遣す
十八日
一　本康宗園来る、明日おでや病死届差出候事、取扱呉候
儀、願承知致帰、尤献上物の廻状持参、即刻柴田へ達す
十九日　晴夜雨
一　おてや病死届差出候趣、本康宗園より文通有之、
一　御奥女中へも御届差出、親類中・組合向・両隣・仲間・弟子中へ
為知遣す　（後略）

史料C　五月雨のかがみ

⑧

（表紙裏）
この書、ことにあやまりはなけれど、假
名遣ひ、てには違ひ、或はことばの
正しからぬこと、多きを止るおもひ
出たれば、閑を得て直すべし
左衛門尉聖謨
はづかしの　筆の下草

かきあつけ（め）
あやまり多き
水くきのあと

本文

天保十あまり四のとしの四月のまつかたより、ほとゝぎす
なく、五月雨にうちつゞき、いと雨がちなる空なりけるが、
同じ八日夕かたより、わけてよすがらおやみなうふりける
暁がたに、わが住めるほとりなる火防のはしる官邸の
鼓のおとに夢おどろかされて、高とのに登りみしに、
辰巳のかたの中そらつらぬく計焔もえ出けり。　こは
大御城のかたにやと、うち驚て従者共よび起ひて
みち行かりの燈かゝげよ、馬にくらおけ、といひのゝしるうち、
又しもかねと鼓と打交て、火防の人催す声きこ
え、こゝろせかるゝまゝに、馬とく走らせて、雉子橋の辺迄
行みしが、まがふべうあらぬ方とみてければ、いうべくも
あらず、おどろかれて、おぼえず鞭鐙を合せ、平川口より

①

もう登りけれど、猛火盛りて、常のかよひぢの行べくも
あらざりければ、道かへておほん表なる御門よりは登りにける
（中略）
蓮池の御門過けるほど、常のおましところの方や
焼にけむ、其けしきみえて、いとふりしきる雨のうちに、
山風けふりをまきうつし給ふみて、龍の首を起すが

ことく焔天をこがして燃のぼり、なみなみの火にはきかぬ荒いそのなみ、松風を千々にあつめしともいふべきやけおとして、御宝庫に程近き弁慶やぐらてふ高とのに、吹なびかすさまを弓手のかたに見すてつゝ、こがねのみくらの前に行しに、御厨の前なる殊に高き高とのに御台所前三重のおやぐらと申也火うつりて、二の丸のかた危くなりければ、かのかたにありつる女房連二、三十人あまり、西丸のかたへ行に逢たり、みなかるきものゝさまにて、肥ふとりたるか、息きれ行なやむを、懐よりもの取出してあたふるもあれば、又どよめき笑ふもありけり、そこ過て、百人の衛士が守りところに来けるほどに、漸ほのくと明初て、御玄関・遠侍などいふあたり、悉 火に成て、御書院御門のわたり也くらに南北の町奉行、十人火消の人々うちのぼり、はやいる

⑨

べきようもあらぬけしきなれば、公のもの荷ひて、きほひ走る人などうちつどひ、いふべくもあらぬを、辛うじておしわけつゝ、もと来し大御門の前に出、馬にうちのりけるに、

（中略）

はじめ火の起りしを

みし時、宮つかへせるわが娘あり、曹司より、もし火の過ちせしことならば、かくとおもひ定めし事のありければ、いかにと尋とひしに、其 詳 なることはあらず、常に娘のかたへもの持ちて行かよひする男の来りて、火の起りけるは、重き女房の梅渓とか、姉小路とかの曹司なりと、人のいふをきゝしとかたり、はたわがかたよりやりし従者も同じ様にいひて、娘は西丸へつゝがなう行けりといひければ、火も出さず、身にも過ちあらぬうへは、またいふべきこともあらずかし、かくきゝぬれば、また衣・調度のかたもなふ焼しぞ、あたらしく名ふなる人のもの おしみすることのかぎりなさ、いとけしからずなどいひいましめける

（中略）

その時南北の町奉行、なんと多くの人々の打かたるを聞に、きのふは火を防もの、殊に

⑩

いのちおしまず、ものせしかば、死に及ぶもありきたり、なかにもみくりやの前なる高とのに、先をあらそひのぼり、はつか成竹の梯、竿くつなぎ、雨になめらかなる軒の瓦より、其上なる軒端へかけ、おのれくが帯をとき結び合せ、梯の横木にまとひつけ、梯のたわみ倒るゝを防ぎつゝ、大やう成まとひてふものをかるげに、打かつぎて、いとも上なる楼のかゝりによぢのぼり、三つまでまとひ建ならべ、火のもえうつるを、恐げもなく打けし、走廻りしは、よも人にはあらじと、あやしまるゝことなりき、されば、ふみはつひておちけるもありけれど、少もおそるゝものなかりき、弁慶やぐらの火のもえ出、そはかうとみえける時、火につゝまれぬ、先にだぞ退き走らめなと

いひしもあれど、町奉行の与力仁杉八右衛門といふもの、
火をけすことのならずば、死するまでの事也、いざや死なむと
いひけるに、人々励されて、軒端はさら也、うちよりも
焔吹出ぬるほどに、火けしかりしをも、つひに消えて、
ほど近き御宝庫も火をのがれ、かしこにありける古き
おほん宝も、つゝがなかりけるなど、或者よにつたえ給ふ、（後略）

⑨

② 史料C　五月雨のかがみ

（表紙裏）

この書、ことにあやまりはなけれど、假
名遣ひ、てには違ひ、或はことばの
正しからぬこと、多きを止るおもひ
出たれば、閑を得て直すべし

左衛門尉聖謨

はづかしの　筆の下草
かきあつけ（め）
あやまり多き
水くきのあと

本文

天保十あまり四のとしの四月のまつかたより、ほとゝぎす
なく、五月雨にうちつゞき、いと雨がちなる空なりけるが、
同じ八日夕かたより、わけてよすがらおやみなうふりける
暁がたに、わが住めるほとりなる火防のはしる官邸の

鼓のおとに夢おどろかされて、高とのに登りみしに、
辰巳のかたの中そらつらぬく計焔もえ出けり。　こは
大御城のかたにやと、うち驚て従者共よび起ひて
みち行千里の燈かゝげよ、馬にくらおけ、といひのゝしるうち、
又しもかねと鼓と打交て、火防の人催す声きこ
え、こゝろせかるゝまゝに、馬とく走らせて、雉子橋の辺迄
行みしが、まがふべうあらぬ方とみてければ、いうべくも
あらず、おどろかれて、おぼえず鞭鐙を合せ、平川口より

⑩

もう登りけれど、猛火盛りて、常のかよひぢの行べくも
あらざりければ、道かへておほん表なる御門よりは登りにける

（中略）

蓮池の御門過けるほど、常のおましところの方や
焼にけむ、其けしきみえて、いとふりしきる雨のうちに、
山風けふりをまきうつし給ふみて、龍の首を起すが
ことく焔天をこがして燃のぼり、なみなみの火にはきかぬ荒いその
なみ、松風を千々にあつめしともいふへきやけおとして、御宝
庫に程近き弁慶やぐらてふ高とのに、吹なびかすさまを
弓手のかたに見すてつゝ、こがねのみくらの前に行しに、
御厨の前なる殊に高き高とのに御台所前三重の
火うつりて、二の丸のかた危くなりければ、かのかたに
ありつる女房連二、三十人あまり、西丸のかたへ行に逢
たり、みなかるきものゝさまにて、肥ふとりたるか、息きれ行

なやむを、懐よりもの取出してあたふるもあれば、又どよめき
笑ふもありけり、そこ過て百人の衛士が守りところに
来けるほどに、漸ほう〳〵と明初て、御玄関・遠侍など
いふあたり、悉 火に成て、御書院御門のわたり也くらに
南北の町奉行、十人火消の人々うちのぼり、はやいる

⑪

べきようもあらぬけしきなれば、公のもの荷ひて、きほひ
走る人などうちつどひ、いふべくもあらぬを、辛うじておし
わけつゝ、もと来し大御門の前に出、馬にうちのりけるに、

（中略）

はじめ火の起りしを

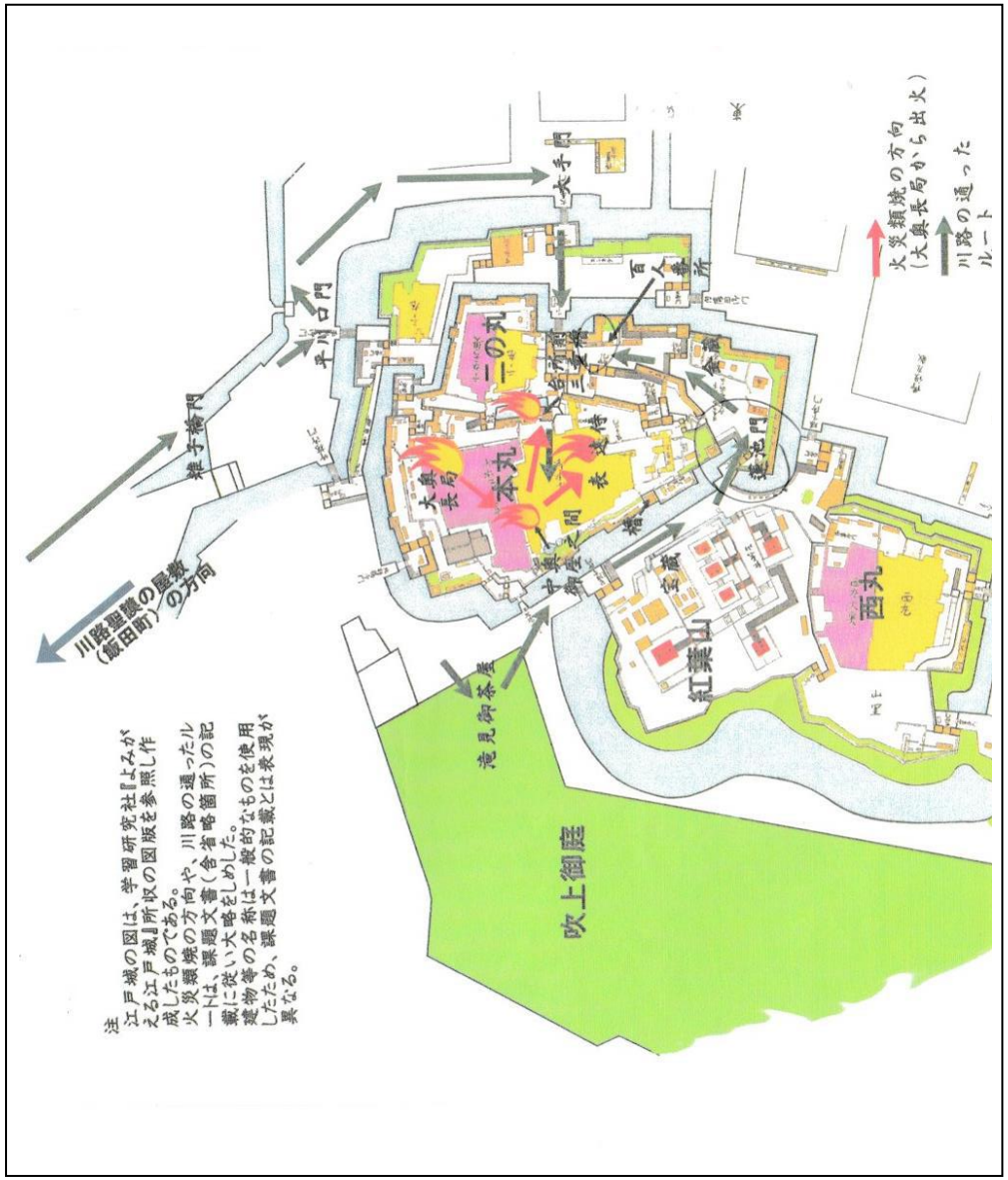
みし時、宮つかへせるわが娘あり、曹司より、もし火
の過ちせしことならば、かくとおもひ定めし事のありければ、
いかにと尋とひしに、其 詳 なることはあらず、常に
娘のかたへもの持ちて行かよひする男の来りて、火の
起りけるは、重き女房の梅渓とか、姉小路とかの曹司
なりと、人のいふをきゝしとかたり、はたわがかたより
やりし従者も同じ様にいひて、娘は西丸へつゝがなう
行けりといひければ、火も出さず、身にも過ちあらぬうへは、
またいふべきこともあらずかし、かくきゝぬれば、また衣・調度
のかたもなふ焼しぞ、あたらしく名ふなる人のもの
おしみすることのかぎりなさ、いとけしからずなどいひいましめける

（中略）

その時南北の町奉行、なんと多くの
人々の打かたるを聞に、きのふは火を防もの、殊に

⑫

いのちおしまず、ものせしかば、死に及ぶもありきたり、なかに
もみくりやの前なる高とのに、先をあらそひのぼり、
はつか成竹の梯、竿〳〵つなぎ、雨になめらかなる軒
の瓦より、其上なる軒端へかけ、おのれ〳〵が帯をとき
結び合せ、梯の横木にまとひつけ、梯のたわみ
倒るゝを防ぎつゝ、大やう成まとひてふものをかるげに、
打かつぎて、いとも上なる楼のかゝりによぢのぼり、
三つまでまとひ建ならべ、火のもえうつるを、恐げもなく
打けし、走廻りしは、よも人にはあらじと、あやしまるゝこと
なりき、されば、ふみはつひておちけるもありけれど、少も
おそるゝものなかりき、弁慶やぐらの火のもえ出、そはかうと
みえける時、火につゝまれぬ、先にだぞ退き走らめなと
いひしもあれど、町奉行の与力仁杉八右衛門といふもの、
火をけすことのならずば、死するまでの事也、いざや死なむと
いひけるに、人々励されて、軒端はさら也、うちよりも
焔吹出ぬるほどに、火けしかりしをも、つひに消えて、
ほど近き御宝庫も火をのがれ、かしこにありける古き
おほん宝も、つゝがなかりけるなど、或者よにつたえ給ふ、（後略）



注
江戸城の図は、学習研究社『よみがえる江戸城』所収の図版を参照し作成したものである。
火災類焼の方向や、川路の通ったルートは、課題文書（含省略箇所）の記載に従い大略をしめした。
建物等の名称は一般的なものを使用したため、課題文書の記載とは表現が異なる。

江戸城の火災一覧表

火災番号	新暦 西暦	新暦 月日	新暦 時刻	出火地点	火災被害	焼失面積（km²） 幕府施設	焼失面積（km²） 幕府管轄外
1	1607	12月19日		飯田町丹羽五郎左衛門宅	田安口門延焼	0.001	0.008
2	1621	3月17日	4時	尾張家の吹上内上屋敷	西丸外曲輪の貯材焼失		0.744
★3	1634	1月6日		本丸台所	本丸台所小火		0
4	1634	9月15日	20時	西の丸台所	西の丸焼失	0.034	0
5	1635	8月24日	2時	桜田の島津家久の屋敷	日比谷口門焼失	0.001	0.036
★6	1639	9月4日	8時	本丸奥台所	本丸焼失	0.042	0
7	1641	1月1日	8時	二の丸炭庫	二の丸炭庫小火		0
★8	1657	3月3日	12時	小石川新鷹匠町	本丸・二の丸・三の丸・天守閣焼失	0.071	4.748
9	1659	12月9日	20時	城下台所町	二の丸に火の粉かかる	0	0.062
10	1661	2月19日	8時	元鷹師町書院番日下部定久宅	鍛冶橋門焼失	0.001	1.339
11	1668	3月13日	14時	牛込酒井忠直の下屋敷	市谷門・虎口門焼失	0.002	4.609
12	1668	3月18日	14時	小日向築地	春屋焼く。本丸大奥ならびに菱矢倉に火の粉かかる	0.012	1.373
13	1717	3月4日	14時	小石川馬場近所	神田橋門・鍛冶橋門焼失	0.002	7.766
14	1724	2月24日	12時	山下御門外加賀町	芝口門・浜御殿茶屋・御舟蔵等焼失	0.003	0.784
15	1731	5月20日	12時	麹町1丁目	虎の門、幸橋門等焼失	0.002	1.744
16	1732	4月22日	14時	西丸下御用屋敷	水野忠定の管する角櫓に延焼	0.001	0.318
17	1747	5月24日	14時	二の丸大奥	二の丸焼失	0.019	0
18	1747	5月31日		畳蔵	畳蔵焼失	0.003	0
19	1747	7月25日	2時	西の丸厩舎	西の丸土蔵を焼失	0.001	0
20	1764	3月22日	16時	神田新白銀町裏町屋	鍛冶橋門焼失	0.001	0.530
21	1768	7月29日	2時	竹橋多門＊3）	竹橋多門焼失	0.006	0
22	1771	1月13日		田安門内の番所	田安門内の番所焼失	0.000	0
23	1772	4月1日	14時	目黒行人坂	辰巳三重櫓・和田倉・馬場先・日比谷・神田諸門を焼失	0.007	14.063
24	1786	2月25日	18時	平川春屋	平川春屋焼失	0.024	0
25	1794	2月9日	14時	糀町5丁目	幸橋門焼く	0.001	2.001
26	1806	4月22日	10時	芝車町	山下門、数奇屋橋門、常盤橋門焼失	0.003	7.876
27	1834	3月19日	12時	松平伯耆守邸	数寄屋橋門・鍛冶橋門焼失	0.002	2.182
28	1838	4月4日	6時	西の丸台所	西の丸焼失	0.034	0
★29	1844	6月25日	4時	本丸御座敷一の側	本丸焼失	0.042	0
30	1852	7月9日	4時	西の丸下広敷2階	西の丸焼失	0.034	0
31	1853	1月7日		富士見宝蔵	富士見宝蔵焼失	0.001	0
32	1855	11月11日	22時	＊4）	安政大地震で城内所々類焼		
★33	1859	11月11日	16時	本丸中の口	本丸焼失	0.042	0
34	1863	7月18日	4時	麻布飯倉五丁目	西の丸焼失	0.034	0.369
★35	1863	12月25日	18時	本丸奥広敷前作事小屋	本丸・二の丸焼失	0.060	0
36	1868	1月21日	4時	二の丸御広敷長局	二の丸焼失	0.019	0